

# ベトナムの茶飲文化・茶業に関する資料初探

## Preliminary Study on the Tea-culture and Tea Industry in Vietnam

西 村 昌 也

NISHIMURA Masanari

中国文化の影響の強いベトナムでは、中国の茶飲習慣受容や茶自体の輸入を古くから行っている。その一方、生茶、竹筒茶、さらには茶とは別種の植物の葉を用いる苦茶などの茶的飲料など独特の茶飲習慣もみられる。東アジア的視点では9-10世紀頃の越州窯系陶磁器の輸出にともなう茶飲習慣あるいは茶器セットの伝来、17世紀後半から18世紀にかけての煎茶的飲茶習慣の伝来が、ベトナム茶飲史における大きな画期になっていると思われる。また李陳朝以来、仏教（禅宗）との関係も深い。そして、フランス植民地時代には茶業の大規模な拡大があり、それが今日の茶飲慣習の普遍化を促進している。

キーワード：ベトナム、越州窯系陶磁器、茶葉、雨中随筆、仏教

### 1. はじめに

現在ベトナムでは、南北に亘って茶飲が非常に普遍的である。中国的茶飲に似たそのありようは、ベトナムが中国文化の摂取をどのように行ったかという具体的研究対象ともなる。また、ベトナム北部は茶の原産地とされる雲南省に東接しており、北部山間部のソンラ（Son La）省などには、樹齢数百年といわれる茶木も存在する。従って、単に中国の茶飲を導入しただけでなく、独特の茶の利用文化についても検証しておく必要がある。

現在まで、ベトナムにおける茶飲の歴史や文化を扱った出版物等はわずかしかない<sup>1)</sup>。本稿では、歴史的資料を中心にベトナムの茶の利用史についてまとめてみたい。ただし、茶や茶飲について直接に言及した文献資料は、時期を遡るほど少なくなるし、筆者自身、文献資料を探索しきれていない。ここでは、様々な資料や研究から、ベトナムの茶飲や茶業に関して多角的に検討を行うことにとどめる。

---

1) Đỗ Trọng Huê 1968 *Hương trà*. Hoa Lư., Sài Gòn. Nguyễn Chí Hoan, Vũ Đình Xuân, Nguyễn Tấn Phong eds. 1997 *Văn hóa trà: xưa & nay*. Tổng công ty chè Việt Nam.

また、文末には参考添付資料として、ベトナムの知識人黎貴惇（1726-1784年）の『雲臺類語』における茶の記述、范延琥（1766-1832年）『雨中隨筆』の「茗飲」を抜粋掲載しておく。

## 2.1 言語学的視点から

現代ベトナム語では“茶”を意味する単語に“Chè (チャー)”と“Trà (チャー)”の両方が使われ、漢字の“茶”には、後者の音があてられている。言語学や民族史的にみて、ベトナム語の話者であるキン（ベトナム）族とホアビン省などに多く棲むムオン（Mường）族は、分化した時期がそれほど過去に遡らないと考えられている。そして、Chèのch音は、このキン族とムオン族が分化する前の言語に存在した音素とされ、Tràに用いられるtr音は漢字音定着以降に加わった音素<sup>2)</sup>とされることから、Chèは古漢越音である可能性が高く、両者は別時期にベトナム語に入った借用語と考えられている<sup>3)</sup>。確かに伝統的な民間歌謡（Ca dao）等に詠み込まれるお茶は“Chè”を使っている場合が多いようで、語感として前者の方が古く感じる。また、ビルマ山間部民族のように、山間部に住む各民族言語の茶を表す言葉にChèやTràなどの明らかに中国語起源以外の言葉がないかという疑問が浮上する。しかし、北部山岳部に多く住むThái系民族の言語には、非中国語系の茶を意味する独自の言葉がないようである<sup>4)</sup>。

## 2.2 現代ベトナムでのユニークな茶利用法や茶以外の植物を用いた茶的飲料

### Chè tươi (チャー・トゥオイ：図1)



図1 生茶用茶葉（フエでは野菜と一緒に売られている）

2) Shimizu Masaaki, Lê Thị Liên and Momoki Shiro 2006 A trace of disyllabicity of Vietnamese in the 14<sup>th</sup> Century: chữ nôm characters contained in the inscription of Hộ Thành Mountain (II). 『神戸市外国語大学外国学研究』64 : 17-49

3) 清水政明氏（大阪大学外国語学部）のご教示による。

4) 樫永真佐夫氏（国立民族学博物館）のご教示による。

これは、茶葉（若葉ではない）を1日程度干して、葉から直接煮出すものである。色は黄味の強い緑で、カフェインが強烈なため空腹で飲むと軽い酔いを生じる。北部から中部にかけてのベトナム独特の茶の飲み方である。こうした飲み方は、他の東南アジアには見られないようで<sup>5)</sup>、ベトナム独自の茶文化と言えそうである。

### Chè rừng (チャー・ズン：図2)

フエでは、山地に自生する茶木（山茶）の枝葉を摘み、乾燥させて茶に煎じて飲む習慣がある。この習慣の面的拡がりには確認できていないが、北部ベトナムの平野部では、あまり見かけない習慣である。



図2 山茶の茶葉（乾燥したものを売っている）

### Chè sen (チャー・セン)

都市部では、Chè sen（蓮茶）と言って人工的に蓮の香り付けをしたティーバッグが多く売られている。蓮茶はもともと蓮の花と一緒に茶葉を蓮の葉でくるみ、香り付けした Chè hoa sen（チャー・ホア・セン）と、蓮の花びらと花芯を茶葉に絡めて香り付けする Chè tim sen（チャー・ティム・セン）がある。沼沢地が多く、蓮が豊かなベトナムに特徴的な茶飲とも言える。阮朝期の官僚の間で、フエ都城皇城内の浄心湖（現 Tĩnh Tâm 湖）で、咲いている蓮の花に茶葉を入れて花卉を閉じて縛り上げ、蓮の香り付けをしたものがはやったようである<sup>6)</sup>。現在でもハノイの西湖の北岸沿いの集落に、この蓮茶をつくる場所がある。ちなみに、中国では、倪瓚（1301-1374年）による『雲林堂飲食制度集』（14世紀半ば）に、蓮花茶と茉莉茶（ジャスミン・ティー）の製法が紹介されている<sup>7)</sup>。

5) 中村羊一郎「東南アジアにおける庶民の茶文化：番茶・食茶文化論」『アジア遊学 88 アジアの茶文化研究』、勉誠出版、2006年。

6) Lý Khắc Cung 2004 *Văn vật-âm thực đất Thăng Long*. NXB Văn hóa dân tộc.

7) 井上充幸氏によるご教示に感謝する。

### 竹筒茶（図3）



図3 Che lam (チェーラム) と呼ばれるタイ族の伝統的茶葉保存法（ラオカイ省にて）。竹筒に茶葉を入れて蒸し焼きにする。（櫻永真佐氏提供）

現在の西北部ベトナムに住むタイ（Thái）族は、竹筒に茶葉を入れて蒸して保存している。これを必要なときに、竹を割いて茶葉を取り出している。雲南の西南域について記した、錢古訓による『百夷傳』（明・洪武年間に成立）には、“宴会則貴人上座、其次列座于下、以逮至賤。先以沽茶及薺叶、檳榔啖之。”という記述がある、この沽茶は山中の茶葉を採って、春夏の間に煮詰めて竹筒に詰めた保存食とされている<sup>8)</sup>。現在でもビルマ・ブラマプトラ川上流のジンポー族などにもあり、東南アジア大陸部北部山間地にひろく昔から存在した利用法である可能性がある。

### Nước vối (ヌオック・ヴォイ)

北部ベトナム農村部の古老に昔話を聞くと、茶は貴重品で、一般にはヌオック・ヴォイ（Nước vối）が、茶代わりに飲まれていたと聞く（図4）。ヴォイの木（*Cleistocalyx nervosum*）から葉や蕾を摘んで、乾燥したものを煮出したもので、ポリフェノールなどを多く含み、治病効果もあるといわれている。こうした茶葉以外から茶的飲みものを煮出していた習慣は数多くあったようで、鄭懷徳の『嘉定城通志』（1820年）には、“桑葉羊桃葉為茶、蒲葵、茶蘿根代檳榔”という記述があり、南部ベトナムでは桑やスターフルーツ（羊桃）の葉を茶にしている。フランス植民地時代以降続く、20世紀の大規模茶生産は、茶葉を安価にして茶飲をさらに普遍化させる反面、こうした伝統的飲料を片隅に追いやりつつある。

### Chè đắng (チェー・ダン：図5)

ベトナムでは現在、苦茶（Chè đắng）という茶的飲料が北部山地のカオバン（Cao Bằng）省やランソン（Lang Son）省から移入されて販売されている。薬用効果もあるようで、カオバンの市場では、ベトナム漢方薬と共に販売されていた。この苦茶は、中国で苦丁茶と呼ばれるものに対応するが、樹種が複

8) 江応梁『百夷伝校注』、云南人民出版社、1980年。



図4 いまでも北部ベトナムの農村では、ヴォイ茶とキンマの実でもてなしをうけることがある。



図5 苦茶の茶葉

数あり、同種のものかどうか確認できていない。葉が、こより状に撚られているのが特徴である。

黎貴惇は『雲臺類語』のなかで、中国の『研北雑誌』にある記述“李仲賓学士言：交趾茶如緑苔、味辛烈、名之日登。”を引用している。この中国江南出身で元の官僚であった李衍（字名が仲賓：1245-1320年）は、墨竹画や有名な文人でもあり、1294年元の使節としてベトナムを訪れており（『安南志略』）、その時の経験に基づいていると思われる<sup>9)</sup>。“登”は中国語音ではdēngであるから、これはベトナム語のđặng（苦い）を音写したものであろう<sup>10)</sup>。黎崱の『安南志略』（1340年頃完成）には、“茶。古載出諒州古都縣、味苦苦難為飲。”とあり、諒州古都縣を苦い茶の生産地として挙げている。つまり、チェー・ダンには13～14世紀には存在していたと思われる。

### Trà cung đình Huế（チェー・クンディン・フエ）

フエでは、阮朝の宮廷で飲まれていた薬草茶（フエ宮廷茶）が売られている。これは茶葉に20数種類の薬草やハーブ（苦瓜、チョウセンアザミ、菊の花、甘草、山芋、姫リンゴ、蓮の花心、ヴォイの蕾など）を混ぜたもので、歴代阮朝皇帝も愛飲していたといわれる。

この他、Atisô (*Cynarascolymus*：チョウセンアザミ) 茶や苦瓜茶が、近年市場にも出回るようになっていいる。Atisôは、植民地時代にフランス方面から持ち込まれダラット（Đà Lạt）などの南部高原部で栽培された輸入植物である。苦瓜などと同様、おそらく近年に飲み物として商品開発されてのものであろう。

## 2.3 茶を冠した地名

ベトナム史初期の茶飲文化や茶業に関しては“茶”字を冠した地名も参考になる。

『大越史記全書』や『大越史略』は、945年に、中国から独立を達成した呉権の長子、呉昌岌が旧臣楊主将に追われて、范令公が根拠地とする“茶郷”に逃げることを記している。茶郷は紅河平野の現ハイ

9) 大槻幹郎『文人画家の譜：王維から鉄斎まで』ベリカン社、2001年。

10) 李仲賓等に関して、井上充幸氏から多大なご教示を頂いた。

ズオン（Hải Dương）省東部<sup>キムタイン</sup>Kim Thành 県と比定されている<sup>11)</sup>。この地名がベトナム側史料における最初の“茶”の出現である。地名から判断すれば、茶を栽培していた場所の可能性もあろう。

李朝期（1010-1225年）以降になると、茶を冠する地名の出現頻度も多くなるようだ。かなり後代の資料ではあるが、『同慶地輿誌』北寧省冊僊遊縣・山は、「月常山壹峯在回抱社、壹名茶山。相傳李聖宗幸此、賜名。」とあり、バックニン省南部<sup>ティエンズー</sup>Tiên Du 県に、李聖宗（在位：1054-1072年）が、行幸時に茶山と名付けた山があることを記録している。また、“茶亭”という地名が李朝期に登場する。『大越史略』巻3・1214年の記述に、“時王（李惠宗：筆者註）在茶亭、聞諸軍皆敗、大懼、命駕入禁中。”とある。この記述は、李朝末期の陳氏勢力による首都タンロン周辺での攻防時のものであり、都城内に、茶飲のための専用建築があったのではないかと考えられる。

中部では、最初の地誌『烏州近録』（1553年以前に編纂）のなかに、現クアンチ（Quảng Trị）省にあたる肇豊府武昌県に茶鉢社、また、現クアンナム（Quảng Nam）省とダナン（Đà Nẵng）特別市の一部に相当する肇豊府奠盤県に茶亭社という地名が載っている。

ところで、中部ベトナム海岸部は、現在でも茶の字を冠した地名が多い。フエ郊外の“香茶”（旧金茶）、クアンナム省の“茶轎”など枚挙にいとまがない。編纂の『烏州近録』にも、これらの地名は出現しているものもあり、その起源はさらにさかのぼる可能性がある。クアンナム省は比較的茶の生産が活発な地域のように、茶栽培と地名が結びついている可能性もあろうが、一つ考慮しなくてはならないのは、中部ベトナムは15世紀まで確実にチャム系住民が多く居住していた地ということである。チャンパ研究のNguyễn Tiên Đông（私信）は、これらの茶を冠する地名はチャム語由来の Jaya（サンスクリット起源の“偉大なる”の意）を漢字に置き換えたものと考えている。

### 2.3 茶の栽培地・製茶地について

後黎朝創立期の重臣、阮薦（1380-1442年）の地誌『輿地誌』には、“先豊生絹、不拔油柵泉朝暨我料、美良象犀角。三農茶惟黄白、源炭惟絺、喝江魚惟英、山圍白雉漆絲。”という記述があり、茶の有名な産地として三農が挙げられている。三農は、現フート（Phước Thọ）省中部に位置し、現在も茶栽培が盛んである。

また、茶の生産地であるかどうかは確定できないが、属明期（1407-1427年）のことを多く記す『安南志原』巻一の山川条では、“太原府 茶流山…五山俱在司農縣”とあり、茶流山という名の山を紹介している。司農縣は現タイグエン（Thái Nguyên）省の東南部に位置している。黎貴惇の『雲臺類語』（1773年著）では、太原での茶の産出に触れている。タイグエン省は<sup>ダイトゥ</sup>Đại Từ 県を中心に現在も茶の生産が盛んである。

ソンラ省<sup>モックチャウ</sup>Mộc Châu 県などは茶の原木や茶葉の生産で有名である。ソンラ省は、かつて西北山岳地方の各省とともに、“興化”として一括呼称されていた。その興化の地誌『興化風土誌』（1779年編纂）には、“土産、禹餘糧、茶、漆、芽、竹。地勢、最廣段山林、可耕之田少、山狭開、處為田、田野肥饒。其穀宜種稻、……”、“茶派山、羅在葵州、産金、山嶺多、在雜菓。”、“香象山、在丕祿縣、山極高廣、産茶

11) 『越史通鑑綱目』による。

香、多犀象”といった記述がある。

『雲臺類語』は、金花の同楽（ハノイ市 <sup>ソックソン</sup>Sóc Sơn 県）、東岸の良規（ハノイ市 <sup>ドンアイン</sup>Đông Anh 県）、美良の芝泥（現ハノイ市 <sup>クオックオアイ</sup>Quốc Oai 県付近）、彰特の綏来と上林（現ハノイ市 <sup>ミードック</sup>Mỹ Đức 県の山際）、扶康の儷美や安道（両社ともフト省 <sup>フーニン</sup>Phù Ninh 県）で、上質な茶の産出を記している。

『大南一統誌』（阮朝の官選地誌。1882年完成）は、河内省（現ハノイ市の一部）において、茶（土茶）の生産地について、「金榜、排禮、各社皆有、惟彰徳縣為佳」と記述している。

『雲臺類語』は、清華省（現タインホア省）は玉山縣雲齋社で山から茶葉を採取し、陰干し後煮出して飲む方法を紹介している。この飲用法は、先述の生茶（チェー・トゥオイ）あるいは“山茶”（チェー・ズン）の飲用法を指すものと思われる。『同慶地輿誌』（阮朝同慶帝期の地理書）も、清華省の物産記述で、玉山縣について“近山居者、頗有南茶”と記している。

中部ベトナムにおいては、黎貴惇の『撫邊雜録』（1776年編纂）が、順化（フエ地域）香茶縣の金茶源（川名）流域で“雀舌茶”を産することを記している。また、『同慶地輿誌』の廣南省（現クアンナム省）の物産記述で、会安（ホイアン）の“南茶”が挙げられている。会安は海岸近くの港市であり、決して茶の栽培に適した地ではない。おそらく、この記述は製茶業が盛んであったことを意味すると思われる。後述する茶菓の生産も盛んであったとすれば、納得がしやすい。また同書は、平定省（現ビンディン省）において、“南茶、間出沿山各村”と記している。

南茶は、北薬（中国の漢方薬）と南薬（ベトナムの漢方薬）にみられる対称的表現同様に、中国茶（北茶）に対するベトナム茶の呼称である。ところで、ビンディン省やタインホア省の南茶が山間部での物産として記述されていることから、“南茶”には、先述した山茶（チェー・ズン）が含まれているのではないかと考える。

ちなみに、茶は中国では薬として、『神農食経』以降登場している<sup>12)</sup>が、ベトナムでは、陳朝期に禅僧、慧靖（出家前は阮伯靖）が著したとされる薬物書『南薬神効』には、“茗茶”として薬効あるものに挙げられている<sup>13)</sup>。記述的には『本草綱目』に類似するが、彼は明に使節として派遣された経験をもつようだ。

1915年、ナムディン省務本県の豪傑村のファム・タック・ドン（Phạm Tác Đông）というベトナム人が、同良という屋号で、中国茶の製茶販売を初め、河南、興安、太平などの各省に、類似屋号で店を開いたこと。1924年には同県出身の別人が、同様な製茶販売を行っていることが記録されている<sup>14)</sup>。務本県の豪傑村などは、もともと商業村で、漢方薬の製造販売でも有名であることから、製茶業やその販売業もその関係で勃興した可能性があるだろう。また、おそらく同じ頃に、華人系住民で中国茶をベトナムで生産販売した屋号なども多くあったことが記録されている。南ベトナムのラムドン（Lâm Đồng）省などの高原地帯は、涼しい気候ゆえに中国茶（烏龍茶など）が盛んであるが、これらは華人系住民が入植して始めた事業である。

12) 本特集の西村・大槻他論文を参照。

13) 板垣明美“『南薬神効』と民間ハーブ治療”板垣明美編『ヴェトナム：変化する医療と儀礼』春風社。

14) Đỗ Trọng Huê 1968 *Hương trà*. Hoa Lư., Sài Gòn.

## 2.4 茶器をめぐる考古学資料と文献や言語資料の接点

文献資料が言及することの少ない考古学資料は、文化史を復元する上で有効なものとなる場合が多いが、茶飲に特有な遺物を認定できない限り、効果的発言は不可能である。

ここでは、初期茶飲文化に深く関係しそうな越州窯系陶磁文化の定着から、この問題に触れておく。

中国で茶器に利用された越州窯系青磁は、日本や朝鮮でもそれを模倣した陶磁文化が根付いている<sup>15)</sup>。ベトナムの場合、すでに8世紀には越州窯製品が輸入されているが、それをモデルとして碗皿などの生産が開始されたのは、ベトナムが中国から独立を達成する10世紀である。バックニン（Bắc Ninh）省のドゥオンサー（Đuang Xá）窯では、越州窯系碗の器形を模して、意図的に自然釉がかかるように焼成した碗が確認されている。また、自然釉製品の托台（図6）や、無釉陶器（いわゆる焼き締め陶）製の船形薬研（茶碾：図7）なども確認されており、これらも越州窯系陶磁の模倣品と考えられる。ドゥオンサー窯以前の陶磁器群からは、これらの器種はまだ確認されていない。この窯址では、施釉四耳壺を無釉陶器としての模倣生産や在地系土器の縄蓆文釜の生産が確認されている。従って、上記製品は、目的をもった選択的模倣生産といえる。つまり、茶器として使うことを前提にした陶器生産が存在したと考えたい。

また、14世紀には、ベトナムで天目碗（図8）の模倣生産が行われている。ただし、ベトナムの天目系碗は、器高に対して、口縁幅が広いもので、中国出土のものとは形態的には、かなり異なっている。釉色も外面が褐釉で、内面が透明釉のものがほとんどである。中国の磁州窯の製品あたりをモデルにしていると思われるが、日本生産の天目碗のように、完全なる模倣を目指したものと考えられるようなものではない。ちなみに、ベトナムに北接する広西壮族自治区でも、南宋代に天目系碗が生産されているが、こちらは建窯製品などの模倣品で、隣接地域で全く模倣関係が異なっていることがわかる。

梅直（法名は圓照：999-1091年）の禅問答集『参徒頭決』のなかで“笑把一甌茶”という語句がある。11世紀には、禅宗寺院で、甌が茶飲に使われていたことを示している。また、陳明宗（1314-1329）時代に活躍したとされる范邁が詠んだ漢詩「訪僧」<sup>16)</sup>、陳頤（後の陳藝宗：1322-1395年）の漢詩「送北使牛亮」<sup>17)</sup>には、“茶甌”が詠み込まれている。周知のように中国では、“甌”は既に『茶経』などに茶飲時の器を指す言葉として使われてい

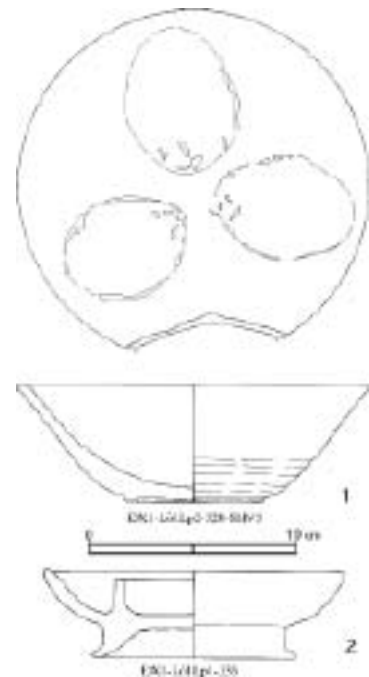


図6 ドゥオンサー窯址出土の碗と托台（自然釉がかかっている）

15) 本紀要の西村・大槻他論文参照。

16) 『訪僧』「擺脱塵中簿牒忙，暫携僚吏訪僧房。碧溪雪淨茶甌爽，紅樹風多竹院涼。徐步要窮終日興，清談為解十年狂。詩禪勘破聊歸去，一路蒲花荻葉芳。」（『越甸幽靈集』、『全越詩録』、『明都詩』所収）

17) 『送北使牛亮』「安南老宰不能詩，空把茶甌送客歸。圓傘山青瀘水碧，隨風直入玉雲飛。」





図7 ドゥオンサー窯址出土の碗船形茶碾（茶碾）と回転円盤  
（両者とも無釉陶器）

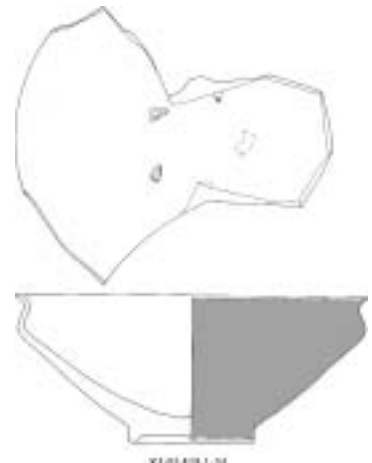


図8 天目系内白外褐釉碗  
（ハノイ郊外キムラン遺跡出土）

る。ベトナム語では”甌”は漢越音化（*âu*）しており、現在の用法では、やや口縁が内側にすぼまり、体部が張り出す深めのやや大型容器を指している。この形態を過去に敷衍するならば、上述のいわゆる天目系碗なども含まれてくるであろう。後述の辞書『大南国語』（1880年完成）の翻訳版は、器用門の“茶甌”に *âm trà*（茶を入れて注ぐための容器）をあてはめているが、これは後世の語用変化であろう。いうまでもなく漢詩の場合は、漢詩的語句の用法と実際の用法のずれも想定しておく必要があるが<sup>18)</sup>、こうした文献資料中の用語と実際の器物の形態や使用法の比較研究は、ベトナム史研究において未着手である。

黎聖宗（1442-1497年）による1475年頃の著作とされる『聖宗遺草』<sup>19)</sup>の「富丐傳」には、“穴土深藏、紅而腐者、糯粟也、量之得八十鉢。剛米剛粟、各各稱是。他如北瓷北鉢、茶杯酒杯、合積盈二箕。衆人相顧詫異、或動顔、或失色、不知何所從來。第此物既為無主之財、雖乞人之賫、亦各文贓而去”とあり、器類を鉢と総称し、中国陶磁の碗類（北瓷北鉢）や茶碗（茶杯）や酒杯が大事にされていたことを伺わせる。当時の陶磁器組成の主要をなす碗類は、幾種類かの器種に分化していることがはっきりしており、そのなかに、茶飲用の杯もあったことになる。また、鉢と杯を区別していることから、鉢が碗類とすれば杯はより小型のものを指していると考えられるべきなのだろう。15世紀には馬上杯などの高脚台の小碗がベトナムでも生産されていることが確認されている。茶杯は小型の碗類のなかに求めるべきなのかもしれない。

『撫邊雜録』・巻6の順化（フエ地域）の風俗記述で、「兵士皆…烹好茗銀磁杯、」兵士が銀や陶磁器の杯で、茶飲することを記している。

范延琥（1766-1832年）による『雨中隨筆』（18世紀末から19世紀の著作）の「茗飲」では、ベトナムの茶飲が中国のそれに似たものであることを記し、康熙年間（1661-1722年）に茶の飲み方が点茶から瀹

18) 范邁の「訪僧」の場合、「碧溪雪浄茶甌爽」と詠んでいるが、少なくとも雪がある光景はベトナムの平野部ではありえない。

19) 『越南漢文小説叢刊2』所収

茗<sup>20)</sup>に変化し、薄手の茶碗が好まれるようになり、文人茶的勃興を伝えている。景興年間（1740-1786年）には、輸入された中国製碗などの茶器や骨董に高額の投資行ったり、蘇州製火爐（風炉）が輸入され、茶飲時の必需品となったことが記されている。

17世紀後半からベトナム陶磁器は、施釉陶器に関しては中国製品の輸入などにより低品質のものに集中して生産を行うようになる。18世紀には、高級品は中国製品に席卷されていたようで、陶磁器のみならず各種中国製品の流入は相当であったと想像され、そうした市況を繁栄している記述と考える。フエ郊外のホアチャウ城（HóaChâu）遺跡では、17-18世紀の煎茶用急須が出土している（図9）。



図9 フエ郊外ホアチャウ城出土急須



図10 19世紀の茶器セット（フエにて）

督学とされる官僚の1887年版画（ベトナム歴史博物館展示資料）には、托台におかれた茶碗とその蓋（恐らく青花紋様）が描かれているが、茶碗の直径は10cm近くありそうな比較的大きなものを使っている。阮朝期の茶飲用の陶磁器（図10）は、中国製青花陶器が多い。

1910～20年代の農村での写真が多く掲載されている『La culture du riz dans le delta du Tonkin』（René Dumont 著、1935年出版）では、アヘンを吸う男と筒型急須と小型の茶碗で茶を飲む姿の写真が掲載されている。急須と茶碗共に青花陶磁器のようだ。

ところで、現在のベトナム語において、北部ベトナムでは飯茶碗のことを bát（バット）と呼び、中南部では飯茶碗程度のものを chén（チェン）と呼び、さらに大きいものは tô（対応漢字なし）と呼んでいる。bát は、ハノイ郊外の伝統窯業集落“鉢場”（Bát Tràng：バッチャン）から理解できるように、“鉢”の漢字が対応する、chén は漢字“盞”がベトナム語化した語と考える。北部ベトナムでは chén は酒や茶を飲む小型の杯的器に用いられている。いずれにしても小型品に、chén を当てはめることは共通している。

20) これが大きな刷新的な変化であったのか、斬新的な変化であったのかは簡単には論ぜられないが、瀹茶自体は、すでに阮薦（1380-1442年）の漢詩『偶成』「喜得身閑官自冷，閉門盡日少相過，滿堂雲氣朝焚柏，繞枕松聲夜瀹茶，修己但知為善樂，致身未必讀書多，平生迂闊真吾病，無術能醫老更加」（『皇越詩文選』所収）にでてい

中国では、唐宋代において盞を小型の碗に対して用いていたようで、茶飲にも使用している<sup>21)</sup>。中国の場合、鉢は梵語の“patra”の訳語“鉢多羅”起源の言葉と理解されている<sup>22)</sup>。“鉢場”は、陳朝期には既に登場している古い地名であるが、“鉢”自体はベトナム仏教に由来し、器もの全体あるいは碗などの器形を指す用語としてベトナム語に根付いたのだと考えたい。この場合、中国で食器などに使われていた“盂”があまりベトナム語に使われてないとするれば、仏教を媒介にした“鉢”字のベトナムでの受容がかなり早い時期であった可能性にもつながり、ベトナムへの仏教伝来が紀元1000年紀の早い段階とする考え<sup>23)</sup>に符合してくる。

その場合、鉢（bát）が碗を指し、より小さなものに盞（chén）を当てはめるようになった可能性がでてくる。中国に使節に派遣されたこともある范仁卿（1373-1377年に科挙合格）は、「送覧山國師還山」という漢詩<sup>24)</sup>で、茶飲に使うと思われる鉢（大きめの碗か）を詠み込んでいる。先述の天目系碗も含めて、14世紀のベトナム製施釉碗は、器形ヴァリエーションが多様化する。鉢、盞、甌のそれぞれに対応した器形や器種があった可能性があるだろう。

## 2.5 茶飲の場所

北部ベトナムでは、Quay chè（クアイチャー）といって、道ばたに小さなテーブルの上にタバコや茶菓子などをおいて、長椅子に客が座らせて茶を飲ませる小商いがあり、どこの町や村でもみられる光景（図11）である。大きな筒型急須と保温具（図12）にたばこや駄菓子があればできる商売なので、お年寄りがやっていることが多い。こうした小商いの茶店や喫茶店的に店構えを持つようなものが、各種文献資料にも出てくる。

16世紀の進士、甲海は親が現バックザン省出身で、ハノイ近郊の窯業集落、バッチャン（鉢場）社に若き頃住んでいた。母親は小さな茶店をしながら生計を立てていたと伝えられる<sup>25)</sup>。また漢文小説類には茶店や茶を飲む場面の記述が多く出てくる。『越南漢文小説叢刊』（学生書局刊・台湾）より幾つかの例を挙げておく。

『會真編』（仙人の事跡集、1850年成立）「鴻山真人」では、“大興門茶店、有擡夫坐此、見一叟吃茶而囊澀、店主苦索之。”とあり、黎朝昇龍都城の南門に茶店があったようだ。

『聴聞異録』（作者成立年不明の伝記事跡集）の「柳杏事跡記」には、“仙主於此處大顯威福、常設酒店茶亭、以招行客、官軍士庶、往来潮戲、死者無算、事聞朝廷。”とあり、『傳奇新譜』の段氏實録——紅霞夫人家譜では、“奇山秀嶺高低、酒店茶樓遠近”とある。

中部ベトナムでは、1778年に現ビンディン（Binh Định）省の港町帰仁（現 Quý Nhơn）から西山党の

21) 『茶文化史にそった中国茶碗の考古学』、水上和則、勉誠出版（2009年）

22) 宮嶋純子氏のご教示による。

23) 西村昌也『ベトナムの考古・古代学』、同成社、(近刊) 参照。

24) 范仁卿『送覧山國師還山』「出山幾日更還山、爲愛山居意自閑。松院渚茶香漠漠、鶴泉洗鉢水潺潺。放開禪價高千古、發露詩名正一般。歸向嶺雲深處臥、暗施法雨洗人間。」

25) Lâm Giang. 2010 *Trạng nguyên Giáp Hải*. Nhà xuất bản: Khoa học xã hội



図11 道ばたの茶店は、情報交換の場でもある（ハノイにて）



図12 筒型急須とその保温具。この器形は過去100年程度使われている。

根拠地（ビンディン城）まで、道ばたのどこでも茶店があるという英人商人の記録がある<sup>26)</sup>。

作家タック・ラム（Thạch Lam）は、1943年に出版した『Hà Nội băm sáu phố phường』（Đời Na 出版）のなかで、ハノイの Đông Xuân 市場前で茶やたばこなどを売る少女の話を書いているが、砂糖を混ぜていた茶のようだ。

## 2.6 茶菓について

『聴聞異録』の「徐式傳」には“一日、與小童遊于香積寺、寺中山水有情、花樹芳菲、景致幽雅。入于内寺、只見一老僧閒坐看書、下有二、三小童、相與烹茶進菓、見徐式問曰、「学生何之」...”とあり、お茶と共に食べ物がお茶請けの食べ物で供されていたことがわかる。

現在、茶菓子に用いられる伝統的なものとしてはバイン・ダウサイン（bánh đậu xanh）と呼ばれる緑豆を使った菓子や蓮の実を砂糖でからめた甘納豆状のムッセン（mút sen）などが挙げられる。緑豆菓子は、北部では、緑豆を粉にして砂糖や豚の脂などと一緒にして半生状に固めたもの（図13）であるが、中部ホイアンなどで生産されているものは、中に豚の脂身を挟んで円形に固めたもの（図14）である。こうした菓子類を文献資料から歴史的遡源を試みるのは、ベトナムの場合ほぼ不可能と思われる。しかし、一つの可能性としては、東アジア地域での比較や民族資料により、起源や伝播時期にある程度の見通しが立てられる可能性がある。ホイアン型の緑豆菓子は、台湾でも同型に近いものが現在売られている（図15）。ただし肉入りはないようだ。台湾での漢人入植とそれに伴う本格的な文化移植を17世紀後半以降と考えるなら、ホイアンの緑豆菓子も17世紀以降と推測してよいのではないだろうか？この場合、北部の緑豆菓子との形態的違いが、根付いた時期差を表すのか？あるいは起源地の差を表すのかは今後の

26) Charles B. Maybon, *Histoire moderne du pays d'Annam (1592-1820): étude sur les premiers rapports des européens et des annamites et sur l'établissement de la dynastie annamite des Nguyễn*, Hants, Gregg International, 1972 (Reprint).



図13 北部ハイズオン省産の绿豆菓子



図14 中部ホイアン産の绿豆菓子



図15 台湾の绿豆菓子（台北にて）

問題である。また、朝鮮でもダシク（茶食）<sup>27)</sup> という茶菓子で、きなこを使った円形菓子がある。東アジア全域での比較も有効な視点であろう。

また、蓮の実を砂糖で絡めた菓子は京都萬福寺で伝統的菓子として販売されている。萬福寺は、黄檗宗の隠元が煎茶文化を伝えた場所でもある。茶菓も一緒にその頃伝わった可能性はないだろうか？

## 2.7 朝廷とお茶

李朝（1009-1225年）と陳朝（1225-1400年）期には、皇帝・皇族による帰依や保護もあって、同時期の中国・日本同様、禅宗が繁栄する。そのなかで茶飲の活発性は、当時詠まれた漢詩などからある程度うかがい知ることができる。

阮萬行（?-1018年）は、21才で出家したが、前黎朝から李朝初期の政治に関わり続けた人物で、『禅苑集英』所収の「国字」という詩作がある。「盖三月之内、親衛登住社稷、落茶印国字、十口水土去、遭聖号天徳」という内容で、これは李公蘊（のちの李太祖）が皇位に昇ると予言したものとされ、茶が落ちて国字を記したとされている。

27) 須川秀徳「朝鮮におけるお茶」『アジア遊学 88：アジアの茶文化研究』, 153-162頁, 2006年.

『傳奇漫録』（伝奇説話集）の「茶童降誕録」なかには、“李惠宗時、昔公為帝所茶童、吾為星曹酒吏、日侍紫微垣、相從舊矣。”という記述がある。李朝期に、皇帝に茶を差し上げる茶坊主的な役割を担った職務があったと考えられる。

陳暉（後の陳藝宗：1322-1395年）が明からの使節（1369年）を見送った時に詠んだ漢詩「送北使牛亮」<sup>28)</sup>に、空になった茶甌で使節を見送ったと詠み込んでいるが、茶飲がこうした使節の歡送迎に行われたことを示しているよう。

茶は朝廷間の贈り物あるいは下賜品にもなっている。黎朝や阮朝は、中国の清朝から茶葉を賜っている。『光緒会典事例』巻507・礼部には1784年の安南国王（黎朝皇帝）遣使時に、正副使に茶膏や茶餅を下賜したこと、1790年には、西山朝の光中帝（阮惠）を装った阮光平が北京に入京した時に、清朝は歓迎の茶席を準備させている。

また、ベトナム朝廷内では、呉時任（1746-1803年）が、皇帝から直接賜った一杯の茶について漢詩<sup>29)</sup>を詠んでいる。

阮朝になってからは、1803年に嘉隆帝が初めて清朝に入貢した時に、磁器や漆器などと共に茶葉4瓶を下賜している『光緒会典事例』巻508・礼部。1804年に清帝から阮朝嘉隆帝が冊封を受けた際に、贈られた品物の中に茶葉4瓶が含まれている『大南寔録』正編・巻23。また、阮朝には、禁軍組織に禁兵尚茶院や侍茶などの下位組織があったことが、『大南寔録』正編などから理解できる。

## 2.8 中国茶の輸入について

ベトナムでも、中国茶は貴重視されていたようだ。

古い資料では『旧唐書』巻19上・懿宗に“咸通4（863）年7月朔…安南寇陷之、流人多寄溪洞。…其安南溪洞首領、素推誠節、雖蛮寇竊據城壁、而酋豪各守土疆、如聞溪洞之間、悉藉嶺北茶葉、宜令諸道一任商人興販、不得禁止往來。”とあり、当時安南（北部ベトナム）に、南中国から茶や薬が移入されていたことがわかる。

『明清史料』庚編第七本「礼部為内閣抄出兩広総督福康安等奏移会」には、西山朝が国境での通商を求めた折、禁止する輸出品に砂糖や灯油などと共に茶葉が挙げられている。

『六朝憲章類誌』は、保泰5（1724）年には、かつてはなく近年出現した品目に租庸の税を課しているが、その中に茶葉が含まれている。当然これは中国からの輸入品を指す可能性が高い。

かつて、ハノイの都城タンロンの東隣区にあたる旧市街区では“行茶庸”という通りがあり<sup>30)</sup>、茶葉を売る店が軒を並べていたようで、19世紀の碑文に地名としても挙げられているが、筆者自身具体的場所を特定できていない。可能性としては、中国茶を売っていた可能性があろう。『Hương Trà』（1968年出版）では、かつてハノイにあった中国茶とベトナム茶両方の大店舗が数多く紹介されている。

28) Đào Phương Bình et al. 1978 *Thơ văn Lý Trần Tập III*. Nhà xuất bản khoa học xã hội, 1978.

29) 「欽侍御前奉賜茶恭記」縹緗祥雲繞殿梁，御爐飛惹紫檀香，九重温旨宣常侍，一品清茶出尚方，鷄舌氣浮銀杏盞，龍鬚味郁玉蘭漿，從容天語弘延問，慙愧疎庸乏贊襄

30) 『大南一統誌』河内省

1742-1743年の記録には、中国船やポルトガル船が組質の青花磁器と共に粗製の茶を、中部ベトナムのホイアンなどに運んでくることが記録されている。

また18世紀末のサイゴン周辺では、順化（フエ）の茶が売られていたことが、『嘉定城通志』の記述（後出）で理解できるが、中国茶の販売並びにその飲用も活発だったようだ。『嘉定城通志』巻2・山川志の藩安鎮（現ホーチミン市の西域と周辺）の記述では、“其貨、北紗、彩、茶、菓、香、紙、一切唐物、人家所有、亦尽投于路、而不敢取、次年粗茶一斤、至錢八貫…、是人皆苦之。”とあり、1782年に西山党が南部に進攻し、華人を肅清し、サイゴンと周辺で商品を川に投げ捨てた結果、翌年、茶などが不足し値上がりして、人々が困ったようだ。中国茶が非常に普遍的な飲物になっていたことを示す資料である。もちろん当時、その地域に住んでいた住民は中国系住民が非常に多かったと考えられ、当然ともいえる。

東南アジア各地に輸出された台湾製の香片茶はベトナムにも輸出されている<sup>31)</sup>。これは、現在ベトナムで販売されているジャスミン茶（Chè hoan hài）の起源と思われるが、現在ではベトナムで生産されている。沖縄でも、香片茶はサンピン茶として一般的になっており、同時並行現象であろうか？

## 2.9 風俗や儀礼に登場する茶飲

北部ベトナムのクアンニン（Quảng Ninh）省 <sup>ドンチウ</sup> Đông Triều 県 <sup>バックマー</sup> Bạch Mã（白馬）寺は、13世紀末に創建された仏教寺院とされ、禅宗竹林派の祖でもある陳仁宗が訪れたところとされる。2010年の発掘調査<sup>32)</sup>で、“進茶”と刻文された碑石（図16）が境内で確認されている。碑石の時期は不明であるが、石材から見て陳朝期に遡るような古いものではない。これは、禅宗儀礼の中に進茶飲儀礼が存在し、おそらく屋外で行われたことを示す資料であろう。また、字喃の辞書『指南玉音解義』（後述）でも、法器部で茶（心茶）が、香、花、燈、食などと共に挙げられているし、茶籩を瓶茶（急須的茶水の容器であろう）として尼に提供するものとしている。茶飲が仏教寺院に根付いている様子が推定される。

1749年から1750年にかけて中部ベトナムを訪れた仏人商人 Pierre Poivre の残した記録<sup>33)</sup>では、客に檳榔の実や茶をもてなすのが礼儀とされている。

18世紀末に、胡嘉賓により編纂された儒教的喪礼マニュアルである『寿梅家礼』<sup>34)</sup>には、祠堂や墓などにお供えをして祭る（奠祭）時に献酒のみならず、點茶をするよう指示している。これは当然、『朱子家

31) 河原林直人『近代アジアと台湾：台湾茶業の歴史的展開』、世界思想社

32) ベトナム考古学院 Trịnh Hoàng Hiệp 氏による発掘調査。

33) “Voyage de Pierre Poivre en Cochinchine. Description de la Cochinchine (1749-1750). Voyage du vaisseau de la Compagnie le “machault”, a là Cochinchine en 1749 et 1750” Revue de l’Extrême-Orient vol.3 no.1 1885, pp 81-121、英訳は “Description of Cochinchina, 1749-1750.” in Li Tana and Anthony Reid “Southern Vietnam under the Nguyễn: documents on the economic history of Cochinchina (Đàng Trong), 1602-1777.”, Data paper series, sources for the economic history of Southeast Asia. No.3, Australian National University.

34) 『寿梅家礼』の詳細な研究に関しては、嶋尾稔「『寿梅家礼』に関する基礎的考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』37号：141-158、嶋尾稔「『寿梅家礼』に関する基礎的考察（二）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38号：123-142、嶋尾稔「『寿梅家礼』に関する基礎的考察（三）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』39号：215-231。を参照。



図16 クアンニン省バックマー（白馬）寺出土の“茶進”の碑石。柱状をしており、中心は円柱状にくり抜かれている。竿のようなものをはめ込んで立てたのであろうか？



図17 祠堂や亭などの各宗教施設では、献茶用の茶器が備えられていることが多い。フエ郊外ミーロイ（Mỹ Lợi）社のディンにて。茶器は、日本の明治か大正頃に輸出された薩摩焼の金襴陶器であった。

礼』からの写しと考えられる。『大南一統志』巻二・承天府は、フエ地域の住民が朱文公の家礼に従って、祖先祭祀などをするを記している。この習慣は、現在でもフエ地域で続いており、廟などで読み上げられる祭文などには、點茶という言葉が記されるし、そのための茶器も常備されている（図17）。また、同書の風俗記述では、“端午節、角黍西瓜薦先祖、艾虎挿門、採葉為茶、號端午茶”とあり、端午節を祝うにあたって、葉を摘んで茶とする風習を伝えている。

『嘉定城通志』では、“元旦寅時初刻、起点香燈、進茶湯礼拝于先祖”とあり、これも儒教的祖先祭祀に関係するものであろう。また、“嘉定客至。先進美榔、待茶。”とあり、先述の中部ベトナム同様、茶檳榔の実で、客をもてなすことが習慣化されている。さらには“又能飲順化茶、昔有阮文盛典人賭飲、用竜甕一大口、満貯甘水、于自煮茶、酌大碗而連飲之、身服重衣、汗湿如雨、須與水盡遂得賭勝。”という記述もあり、当時フエのお茶がよく飲用され、茶飲による賭博の習慣が高位者にあったことが理解で



きる。

## 2.10 辞書類に見られる茶

初版が1619年とされる喃字の辞書『指南玉音解義』の重刊本（1761年印刷）では、先述の法器で茶具などが紹介される他、根藤類で好茶が紹介され、“茶祿礼和進登”とされる。先述したような正月の儒教儀礼的茶礼的を行っていたことを指しているのかもしれない。

『大南国語』（阮文珊著、1880年完成）では、飲食門において茶の項の説明で、雙井、顧渚、紫筍、陽羨、春池、蒙頂、石花、さらには龍団や舌雀などの中国の名茶や北方中国での茶の呼称である酪奴などを挙げている。また、煮茗は煨茶であり、烹茶も同義としている。器用門では、茶碗、茶杵、茶甌、茶奩、鄧圖茶、茶銚（急焼圖）、法器門で、茶籩（茶瓶のこと）を挙げている。

『南方名物備改』（鄧春榜による1901年編纂）では、器用門の祭礼の条で“象罇、為象形空其中、以盛酒、今多盛茶”としている。茶瓶を“瓶茶、状如偏提、貯湯水、曰湯瓶”と記述し、茶格、欄茶などが茶飲専用の道具として紹介されている。茶瓶は筒型急須のことであろう（図12）。茶格は玩器の条でも紹介されている。また、草門で南茶を挙げ、茶木としている。

## 2.11 フランスによる茶業の拡張

仏領時代初期には、北部のフート（Phủ Thọ）省、イエンバイ（Yên Bái）省、中部のクアンナム（Quảng Nam）省などでベトナム人による茶生産が盛んであったという記録がある<sup>35)</sup>。そして、1893年には、既にフランス本国へ茶葉が輸出されており、ヨーロッパ人による茶栽培は、クアンナム省ホイアンで、フランス人による製茶工場操業が最初らしいが、品質がよくないため、ふるわなかったようである。会安での製茶業はそれ以前からあった伝統的製茶業をある程度基盤においたものであった可能性が高い。プランテーション式の大規模生産は、1924年頃ヨーロッパ人が、中部のコントウム（Kon Tum）、プレイク（Plei Ku）、クアンナム各省でアッサム種の茶生産を始めている。

南部ベトナムでは、フランス資本による農園生産が行われ、北部からの移住労働力を利用して茶生産が行われている。1939年には紅茶2000トン、緑茶370トンを生産している。紅茶はセイロンやジャワ産より良く、価格も支那茶やビルマ茶に匹敵するとされ、1937-1939年の紅茶輸出は、フランス向けが主で、その次をチュニジアやアルジェリアが占めている。緑茶はアルジェリア向けが最も多く、その次がフランスである<sup>36)</sup>。

また、1923年には茶を3328トン輸出し、支那茶を1672トン輸入したという記録もある<sup>37)</sup>

35) シャルル・ローブカン著；浦部清治訳『仏領印度支那経済発達史』日本国際協会、1941年、日本貿易振興協会『仏領インドシナと貿易事情』、1941年

36) 日本貿易振興協会、前出

37) 茶業組合中央会議所編『海外に於ける製茶事情』茶業彙報第13輯、1927年

### 3. おわりに

以上、各種史料からベトナムにおける茶飲や茶業の歴史を素描してみた。

行論から、ベトナムの茶飲文化は、中国からの文化・経済的影響を色濃く反映していることが明らかであるが、日本同様、幾つかの画期や重要な時期というものがありそうである。第1の画期は9-10世紀の越州窯系製品の輸入とそれに伴う茶文化の移入で、仏教とも深く関係している。第2は、17世紀後半から18世紀にかけての煎茶的（泡茶）飲用法やそれに伴う文人茶的茶飲習慣の勃興であろう。また李陳朝期の禪宗と茶の関係の深さも明らかで、それが14世紀に茶器を中心とする陶磁器の発展につながっていると推察する。また、フランス植民地時代以降の大規模茶生産が、結果的には現代ベトナムでの茶飲をさらに普遍化させているともいえよう。

茶の利用史も他のベトナム史研究同様、史料の数量的制約から具体的復元が難しいテーマであるが、禪宗や儒教儀礼上での位置づけのように、中国起源の慣習が日本や朝鮮などと同様な変化の歴史をたどっている部分が多い。特に仏教習俗や関係資料からの研究は、まだまだ大きな潜在可能性を秘めている。また、茶菓や茶器の呼称で論じたように、地域間比較や異種史料間の比較により復元あるいは推定できる歴史事象も多いと考える。今後さらなる東アジア地域間での比較研究深化が望まれるテーマである。

また、ベトナムでの茶飲文化の独自性も苦茶や生茶などにおいて確認できたが、山間地域の各民族も含めて民族学的調査も広範にとりおこなえば、茶飲に関する様々な習俗がさらに明らかになるのではないかとと思われる。

#### 参考添付資料

『雲臺類語』（黎貴惇による1773年の著作）の茶に関する記述抜粋。

「『茶経』、茶南方嘉木也、樹如瓜蘆、葉如梔子、花如白薔薇、實如栴檀、葉如丁香味到寒。廣博物志云：阜廬茗之別名、葉大而蕊小、南人以為飲。唐陸羽、茶経曰：南人有瓜蘆亦以茗而苦、取作屑煮飲則通夜不寐。交廣最重、客來先設蓋。陶弘景語：茗溪處士亦刮目是茶耳。李時珍曰：「阜廬非茶也。一片八壺味極苦、以則反有甘味含、嚙利咽喉之疾」。研北雜誌云：李仲賓學士言：交趾茶如綠苔、味辛烈、名之日登。按清華玉山縣。庵禪庵戒庵閣諸山、皆出此種連翳滿林、土人取葉剝碎、陰乾煮飲。性頗寒、能清涼心肺、解渴、甘睡。花葉尤勝、有自然之香。其村名雲齋社、蚌上申者、專業此販賣、俗因呼為蚌茶。出於金花之同樂、東岸之良規、美良之芝泥、彰特之綏來、上林、扶康之儂美安道者、亦為上品。菉豆微炊技沸湯、中頃之色其正綠香味亦不減新茶。茗明人謝在枕所稱者：此特暫辰以飲聊鮮望梅耳。惟菊花湯香味殊勝、從容兀坐開依、獨酌神覺爽然、自有清逸出塵之致。」

『雨中隨筆』（范延琥による、18世紀末から19世紀初に著わされた隨筆）の「茗飲」抜粋。

「茗飲之始、詳見堅瓠諸書。盧、陸諸家造樹赤幟、王、宋始見鑄鼎瓷器。然大約皆煮泉泛茗、如介甫之品陽羨茶、子貼之潑雲龍茶是已。明清而後、其製精、其用周、毫種、松焙諸色、與夫甌壺、瓷碗、炭火、爐銚、無不經營慘淡。而武夷茶、成化窯、陽羨砂壺、遂為天下絕品。俗尚製、間或不同、亦不出此數者而已。至于蒙頂、雪牙、紅心、泉窯、雖中州人士未得遍嘗、蓋未可以臆論也。

我国嗜好與中國略同。余生長景興盛時、宇內無事、戚里公侯紳弁子弟、以侈靡相高、一壺一碗之費、至十數金者。每經遊茶肆、繁馬商纏、白繒青蚨、從者相屬；間居對啜、或賭茶候之早晚、或猜市價之低昂。彼愛花香、此喜後味；傾壺覆

碗、指號索名；甚至下定金以購正山、賃商槽而陶新器。種種好尚、可謂極矣。然茶之真趣、豈在是哉！蓋茶之為物、其性介而潔。其嗅清而香。風晨月夕之暇、淪而薦之、與酒陣詩城、相為主客、可以醒幽夢、可以浣俗腸。古人尚之、良有以也。近代以降、賞鑒日精、味之稍別、製之稍佳者、類以別之。而爐鼎甌盃、亦各取其適用。然而刊經類譜、識者尚厭其煩。若乃味雙槍於蠅蚋之場、歌七碗於圓圍屋、塵囂聒耳、俗慮縈心、雖宋樹盈甌、古甕奪目、吾不知其真趣之所在也。茶僊（仙）可作、當不以此言為誣。

歲戊午秋、余就館河柳之慶雲村。在京諸生、時相問遺、雖蔬水不甚裕、而茶品未嘗闕也。慶雲處蘇瀝下流、北接春泥、南臨杜河、黃舍、寧祝、紫沉、南公諸山遙拱其西、月蓋、大蓋、柳內、柳外、皆在指顧之內。地產荔枝、扶藁村、郭林溪頗稱幽勝。蒙課之暇、輒與鄉表蘇儒生携爐雲寺、或登邑西之三層岡汲泉細淪。浮雲聚散、野鳥鳴啼、與夫草木之榮謝、行旅之往來、往往寄諸篇什。館後枕蘇江、循堤北上、至蕊溪橋、即村人納涼之所。一夕、余偕蘇兄登橋觀漁槎網罟、兩岸樹影參差、波澄月小、偶坐叢談、不覺心神俱爽。荏苒數四年間、余既解館、而蘇兄亦已物化。錢牧庵所云：「山水朋友之樂、造物不輕與人、殆有甚於榮名利祿者」、不其然歟。康熙以後、始以淪茗代點茶。大略、茶碗貴小且薄、取其發香味；壺注直、則出水不留、拌（盤）面平、則放盞不側；爐底之竅厚而疏、則火性常烈；銚心之上、凸而薄、則火氣易通、所謂「始粗終精」是已。近代用鍋爐銚、製頗工巧、而金火相逼、時帶焦腥、不若陶瓦之為佳也。然權門富屋懶於自煎、每每委之僮僕、取其易用難毀、不得不代以銅、此固不須贅筆。景興間、蘇州火爐南來、俗爭傳尚、與北炭均為茶客必需之用、近有悟其術者、罨火而炭、搏土而爐、與北製不甚分別、久皆羨之。余因慨夫前此秉國物之未嘗留意于煎民也。」

